

## 書評

ラナ・ミッター（吉澤誠一郎訳）

『五四運動の残響：20世紀中国と近代世界』（岩波書店、2012年）

2014年度東アジア地域史演習(水羽信男ゼミ) 参加者<sup>1</sup>

本書は「清末中国における男性性の構築と日本」などで斬新な成果を生み出している吉澤誠一郎が、Rana Mitterの*A bitter revolution*を翻訳したものである。二人は20歳前後の多感な時期に、1989年の中国の民主化運動とその挫折（「六四」）を直視した同世代であり、おそらく問題意識（の一部）を共有している<sup>2</sup>。本書の構成は以下のとおり。第1部：衝撃（発火点 1919年5月4日／二都物語／幸福の実験／孔子よ、さらば）、第2部：余波（死の国／明日、全世界は紅くなる／『醜い中国人』と『河殤』／思い切ってやってみる）。本稿ではまず全体の簡単な内容紹介を行い、次いで論評を加える。

20世紀にはいると中国では、西洋による侵略と国内政治の混乱に対する危機意識が深まり、「救国」意識が高揚して危機を克服するために伝統文化への批判が本格化した。本書の課題は、清末以来の知的営為の不可逆的な変化を生み出した「五四」世代と彼らの「新文化運動」がたどった約80年間の道筋を「たどることである(23頁)」。著者は知識人の言説だけでなく、彼らの生活の場も重視し、中国をとりまく国際的環境に目配りして、五四が生み出した新思潮の変遷を跡づけてゆくことを課題としたのである（第1章）。

五四運動の発生地であり自由な空気を持った北京。租界があることによって外の世界と繋がり、商業・マスコミの中心を担った上海。第2章ではこの二都で科学・民主主義といった近代と向き合い、愛国とは何かを考えながら大人になっていく若者たちを描き、何故この時期に、この都市を中心にして多様な思想が生まれることになったのかを考えている。中国の伝統を否定して新しい価値観を手にしようとする若者たちは希望と不安を胸に抱えた。著者は魯迅、杜重遠、丁玲、鄒韜奮という、異なった人生を歩んだ四人に着目したが、彼らはみな新文化の運動の核心をなす、今までの中国文化に疑問を

投げかけ、近代化を論じた知識人であった（第2章）。

五四期には、若者や女性労働者などは仕事や恋愛などにおいて新しい機会を得ることができた。しかしその一方で、彼らをしばってきた伝統的な儒教的考え方も人々の心の中に根強く残っていた。そのほざまで若者たちは揺れていた。そんな若者に対して、鄒韜奮は若者たちの悩みに答え、儒教的な抑商精神を打破し、起業家精神の高揚を図るために中国の進むべき指針としてエジソンなどの外国人を紹介した。また杜重遠は自ら起業し、自らの事業や経験によって、中国を救おうと考えた。新文化時期は人々がこのように悩みながらも自らに機会がある限り、様々な幸福の実験を行った時代だった。しかし、日中戦争などによって、そのような幸福の実験は喫緊の課題ではないとみなされ、それを試みようという機会は減っていった（第3章）。

これまでの研究では、新文化運動において儒教は徹底的に批判されたという。しかし当時においても、鄒韜奮ら多くの知識人は、近代化の過程のなかで儒学のもつ肯定的側面にも着目していた。また当時の知識人は「救国」のために、国際的でコスモポリタンな立場を示し、欧米や日本だけでなく、東欧などからも学ぼうとした。といはえ「救国」の課題は国共両党によって担われ、両党はやがて革命の指導権をめぐって厳しく対立するようになる。当時の国民党の政権は、今日の共産党政権からは批判されるが、「救国」を課題として、近代化を推し進めようとしたことは間違いなかった（第4章）。

1930～1960年代の中国は、世界情勢の変化の影響で、五四期のような外向き・多元主義的な傾向が収まっていた。日中戦争、国共内戦、冷戦の戦争の時代である。国民党時代には共産党を支持するものや、日本を批判するような思想・出版は禁じられた。毛沢東の統治下では、大衆運動が利用されたが、それは共産党の統制下におかれた。また冷戦期には、共産主義と資本主義とに思想が二極化していたが、中国は他国に依拠せず自立することを目指し、毛沢東は大躍進を試みたが失敗に終わった。国家権力が脆弱だった五四期とは異なり、共産党が統制力を持つようになった中国では、危機に対抗しようとするあまり、自由が失われ、多くの餓死者さえ出たのである（第5章）。

文化大革命（文革）には、五四との連続および中国なりの近代性の系譜を見て取ることができる。文革が過度な破壊的性質を帯びたのは、冷戦時期の

国際的な二項対立の構図と中国政治の傾向とが合致し、毛沢東の革命観がこの傾向を強めたためであった。五四と文革との共通領域としては、「若者の重視」、「偶像崇拜」、「ロマン主義」などが挙げられる。一方で、五四最大の特徴は、啓蒙主義的立場と科学や技術に対する崇拜であったのに対し、文革期の中国は排外的で不寛容であった。技術問題については、文革期の姿勢は清末の「中体西用」論と類似しており、その反動として1980年代に全面的な西洋化論が台頭したのは、五四期と同一視できる。しかしながら文革は「奇妙」ではあるが、五四の近代性を継承したものであった（第6章）。

1980年代の「新時期」の特徴は明確な終結点（天安門事件）があることである。「新時期」の前（1969-76）には権力闘争が相次ぎ、鄧小平が権力の座につくと、排外的態度の改善を主張した。「新時期」には経済への関心も高まり、民間企業に飛び込むことに関心が集まった。『醜い中国人』と『河殤』は「新時期」の産物であり、両作品とも中国が危機にあるという想定に基づき、中国の発展を願うメッセージが込められている。天安門事件の前には「民主」をめぐる議論が活発化したが、ジェンダーやエスニシティという課題は軽視されていた。今日の中国でも同じ傾向が見られる。また、中国における「民主」は力を得るための手段であり、欧米における多様性・自由主義を重視する民主主義とは意味合いが全く異なる「民主」である（第7章）。

「新時期」後、政府は抗日戦争を持ち出して人々を支配者の周りに集め、団結させようとした。また政府は新たな国際秩序を支配するアメリカに対する危機感を自ら作り出し、大衆的なナショナリズムを掻き立てようとした。1990年代以降の新たな思想家も、外を警戒するナショナリズムを共有し、欧米の思想をそのまま受け入れることには批判的だった。だが、台湾は中国が今後民主化を行っていく上でのモデルになる可能性がある。台湾では儒教的規範が浸透している一方で、欧米の概念や制度を受け入れているからである。政府や知識人が強調する危機が実際に訪れる可能性は低く、今、この最も危機の少ない時期に、中国の民主化のために必要なのは、思い切った様々な「幸福の実験」を試してみることだけである（第8章）。

このように著者は、中国（大陸）で多様性とリベラリズムを定着させるために、様々な可能性を試みることの必要性を強調している。その成功を見通

す根拠は台湾の経験におかれているが、それだけでなく著者は共産党員に限らず今日の大陸のエリートたちが、中国の国家的・民族的危機を誇張し、民主化を国家の力を弱めかねないものとみなしていることに批判的である。たしかに著者は、中国の民主化にとって何が第一の課題なのか——たとえば複数政党制に基づく全国レベルの普通選挙の即時実施なのか、あるいは民主化を担う市民層の教育などを通じた創出なのか——などを明示していない。しかしこうした曖昧さを含みながらも、著者は中国人との知的対話を試みようとしており、極めてアクチュアルである。

昨今の中国をめぐる議論では、時にその専制的な支配のありようを中国の前近代性や反近代性と結びつける向きもあるが、著者はこうした俗流理解を峻拒し、近代性を 20 世紀中国に一貫する特性と見なし、本書の分析の基本的視座とした。さらに中国における「民主」が対外的な凝集力をもつことを優先して、内部での多様性を認めかねない点を危惧し、欧米の民主概念と比較して論じるなど、近代中国の言説分析としても、興味深い論点を多々提示している。また歴史事象に対する評価基準を当面の政治課題にのっけではなく、女性や少数民族など抑圧される側の権利を徹底的に保障しようとするか否かにおく点は、著者ならでのものである。

我々がもっとも着目したのは、本書の随所で民衆の「語り」を散りばめ、その時代を生きた人にスポットライトを当てることで、大きな歴史の流れに埋没しがちな「個人」を読者に意識させることに成功した点であった。というのも本書は総じて政治、経済、思想を中心とする密度の濃い重厚な構成で、中国近現代史の専門家には重宝され得るが、それだけでは専門家以外の読者層に読み難い印象を与えかねないからである。広範な読者に向けて本書を執筆した著者は、成功裏に叙述を進めているといえよう。

特に第3章は、本著全体の中でも重要な位置にある。というのも、本章では当時の中国市民の日常的な生活が描かれており、中国近現代史に興味を持つが専門知識の少ない読者にとっても、比較的容易に読み進めることができるからである。男女の恋愛模様を描いた丁玲の「ソフィー女士の日記」を、西洋の「ロマンティック」を中国人の心の中に創造させた作品であると読者に紹介し、また鄒韜奮の『生活』の「読者からの便り」の紹介では、婚約者

がいながらも職場のある男性から好意を受け続ける女性の悩みが取り上げられている。このように第3章では、政治や経済についての難解な内容ではなく、当時の中国変革期の人々の恋愛の具体例を示しながら執筆されており、その読み易さが一種の緩衝剤となり、本書が政治、経済、思想に関する一辺倒な歴史書になることを防いでいる。

そのほか、第二章では文筆家の朱海濤の大学生時代の生活の様子を紹介することで、読者に五四時代の北京やその大学の自由さをより鮮明に印象づけている。また文筆家のような人口に膾炙した人物だけではなく、第五章では安徽省の一般女性が、大躍進政策の中で飢えに苦しんだ凄惨な回想も取り上げている。一般女性の「語り」を挿入することによって、知識人だけではない社会の姿を捉えることが出来る。他にも、第七章の恋愛や仕事後の私生活について語るバス車掌のインタビュー等、枚挙にいとまはなく、読み手に当時の雰囲気や語り手の心情をありありと伝えている。

もちろん、取り上げられた「語り」は、著者が恣意的に選択したものであることは免かれぬ。だが、日本語訳の自然さともあいまって、その卒直な思いを伝えることで、整然とした著者の叙述と明確なコントラストを示し、読者を惹きつける。人々の生活や個人の感情を覗くことによって大きな歴史の流れを把握し、また逆にその歴史の流れを受けながら生きていく人々の姿を描き出していくという、叙述のスタイルである。20世紀の初めの新文化運動で示された、大きくかつ複雑な思潮を表現するために、多くの人の「語り」を挿入することによって、中国を貫く重層的な五四の思想を表現したといえよう。そしてそのことによって、我々は本書を通じて中国と中国人の近代について、偏見なく考察する基礎となる知識を得ることが出来るのである。

## 注

- 1 本稿は広島大学総合科学部同演習の担当教員・水羽信男と以下の受講生が作成した。岡添りえ、石原あかり、後藤拓朗、白神直弥、高橋優太、西村咲輝、野村優希、三浦翔悟、武藤舜。
- 2 本書については吉澤誠一郎「五四運動から読み解く現代中国：ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手がかりに」『思想』第1061号、2012年も参照のこと。